

埋蔵文化財発掘調査ニュースNo. 1

銘苺古墓群(南地区)



1992年1月

那覇市教育委員会

銘苧古墓群(南地区)の発掘ニュース

(1) はじめに

天久解放地(2,140,000m²)には、昭和63年から平成元年にかけて行なった分布調査及び試掘調査の結果、先史時代から琉球王府時代まで、幅広い時代の遺跡が9ヵ所確認されています。

那覇市教育委員会では、平成2年7月から解放地内にある銘苧古墓群(南地区)の発掘調査を行なっています。本解放地は、那覇新都心開発整備事業が進められることになっており、9ヵ所の遺跡は平成6年度までに発掘調査を完了する予定です。

今回発掘調査を行なっている銘苧古墓群(南地区)は、銘苧原を流れる銘苧川(メカルガーラ)と名護松尾原を流れる大湾川(オオワンガーラ)の両岸を挟む琉球石灰岩の崖下に立地しています。この2つの川は合流して多和田川(タワタガーラ)となり、安謝川へと流れています。

(2) 掘込墓

現在までに確認された181基の古墓のうち178基は掘込墓です。これらの墓は、琉球石灰岩の岩陰部分を掘込んだり、或いは琉球石灰岩とその下に堆積する粘土層(方言でクチャと

呼ばれる土)を掘込んで墓室をつくり、その前面に石を積み上げて入口を設けた、いわゆる掘込墓(方言でフィンチャーまたはフィンチー)と呼ばれるものです。

墓室内の施設には、1~3段の壇を設けたもの、壇の無いものなどがあります。外部の施設についても、入口前庭部に壇(方言でサンミデー)を設けたもの、排水のために墓庭に暗渠を通してあるもの、墓庭に石を敷きつめたもの、墓庭を石積みで取り囲んだものなど様々な種類の墓があります。

一方、これらの墓とともに、墓の中に納められている厨子甕(骨壺)や、当時使用されていたと考えられる碗・皿・瓶・壺などの陶磁器、古銭、キセル、指輪、かんざしなど様々な種類の遺物(副葬品)が掘り出されています。

今回調査したこれらの墓が何年前につくられたかについては、今後の資料整理や聞き取り調査などによって明らかになると思いますが、これまでに掘り出された遺物、特に厨子甕に書かれた文字(方言でミガチ)の年号で見ると、石棺の「雍正8年(1730年)洗骨」、赤焼御殿型の「乾隆4年(1739年)洗骨」や「乾隆30年(1765年)洗骨」などがあります。

(3) 亀甲墓

B地区（第2図参照）で2基の亀甲墓（方言でカーミヌクーバカ）が発掘されました。そのうちの1基は墓室は掘込みで、屋根を亀甲に仕上げた独特な亀甲墓です。掘込墓から亀甲墓への移行を研究する上で重要な墓と考えられます。

(4) 囲込岩陰墓

囲込岩陰墓（方言でチンマーサー）が1基発掘されました。B地区の4号A墓の掘込墓の下（4号B墓）から発掘されました。岩陰の粘土層（方言でクチャ）を若干掘り込んで石を敷き、岩陰前面を石積みで囲込んでいます。墓室は約9㎡で、その中で36体の風葬人骨が発掘されました。入口近くに一次葬（屈葬）を行ない、奥の方に二次葬（集骨）を行っています。石棺や陶棺などの蔵骨器がなく、短い鉄の角釘が多く出土することから薄い板でつくった木棺に納められていた可能性が考えられます。二次葬は四肢骨（手や足の骨）を下にし、最上位に頭骨が置かれています。その集骨の周囲からも短い鉄の角釘が出土することから、集骨のときも木棺に納めた可能性が考えられます。

副葬品としては、人骨周辺の土から直径約3mmのガラス製小玉（ビーズ）が多く発掘されました。ほかに石製の硯が1個集骨の下から発掘されました。副葬品ではないですが、人骨周辺の堆積土から13～14世紀に比定される須恵器壺の破片、中国青磁碗の破片、高麗青磁碗の破片、土器壺の破片などが発掘されました。しかし、人骨の年代についてはさらに遺物や遺構を詳細に検討したいと考えています。なお、人骨については長崎大学医学部で詳細に検討されることになっています。

(5) おわりに

川の兩岸を挟む琉球石灰岩の崖下に所狭しと並ぶ181基の古墓群は実に壯観であり、「死者の谷」を想像させます。都市地区にこれだけの古墓群が残っていたことが不思議なくらいです。しかも、囲込岩陰墓、掘込墓、亀甲墓など墓の種類も多く、今後の墓の研究においては、欠くことのできない重要な資料となると考えられます。

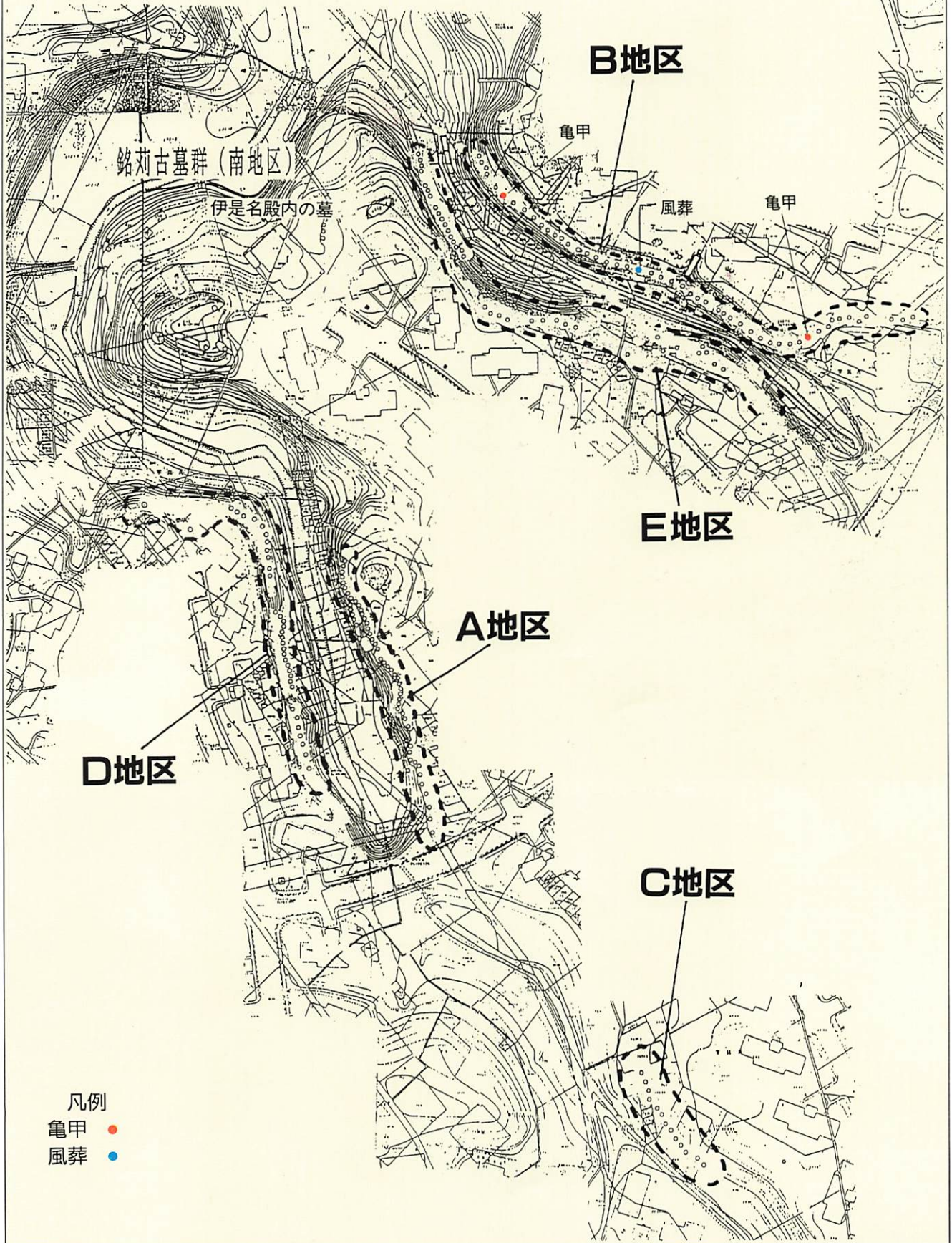
一般市民の関心も高く、昨年10月19日・20日の一般公開では、およそ800人の見学者がありました。

那覇市概略図と天久解放地 (第1図)

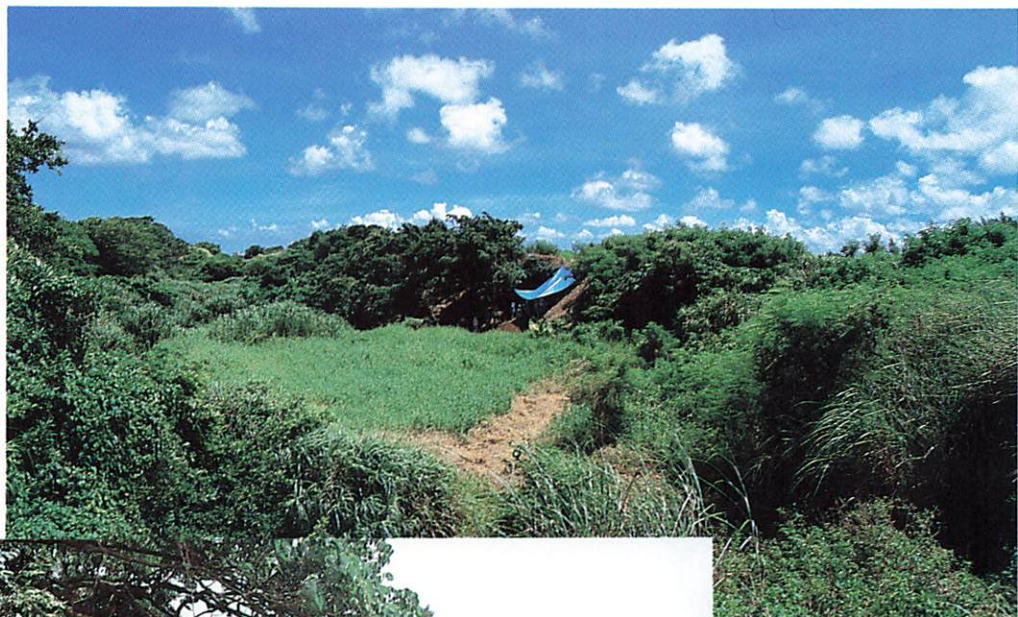


銘苅古墓群 (南地区) (第2図)

平成4年1月1日現在

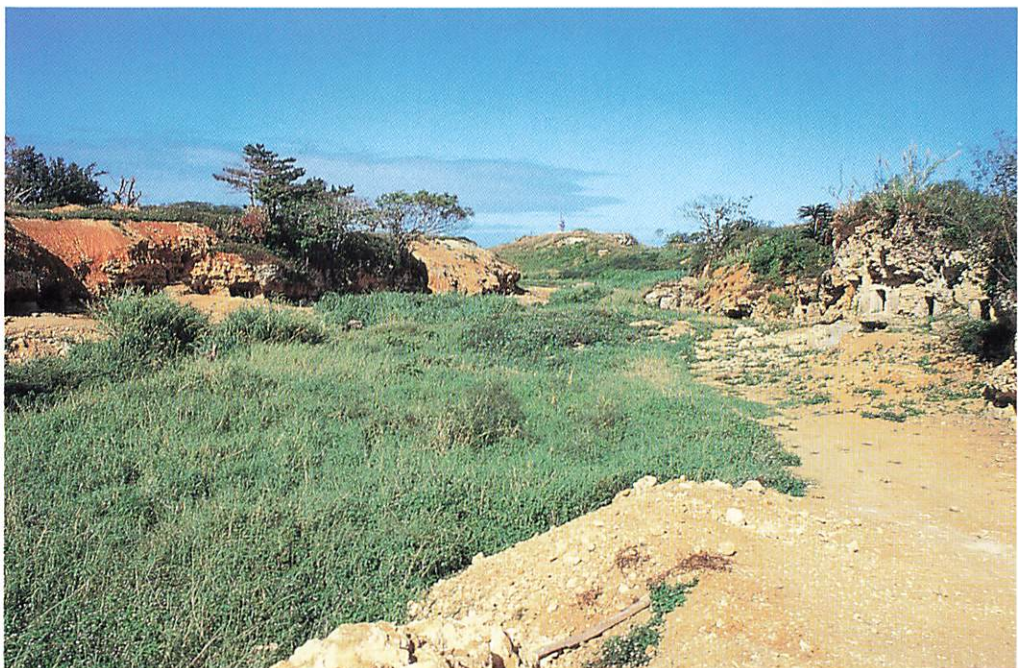


発掘前の状況（テントが発掘開始地点）（A地区）



発掘開始（A地区）

大湾川を挟んで並ぶ古墓群（左がD地区、右がA地区）





発掘状況 (A地区)



発掘完了 (A地区)



2段に並ぶ掘込墓
(A地区)



岩におしつぶされた古墓
(A地区)



墓室に安置された厨子壺
(A地区)



墓庭に埋められた皿や杯
(A地区)



銘苅川を挟んで並ぶ古墓群
(西より)
(左がB地区、右がE地区)



銘苅川を挟んで並ぶ古墓群
(東より)
(左がE地区、右がB地区)



墓室に安置された厨子甕
(B地区)



空から見た古墓群
(C地区)



埋まった状態の石厨子
(C地区)



発掘された石厨子
(C地区)



亀甲墓の発掘状況
(B地区)



発掘された亀甲墓
(B地区)



亀甲墓と掘込墓



風葬墓の上につくられた
第4号A墓 (B地区)



第4号A墓の下から発掘された人骨（囲込岩陰墓）
(B地区4号B墓)



一次葬（屈葬）人骨の状況
(B地区4号B墓)



二次葬（集骨）人骨の状況
（B地区4号B墓）



人骨取上げ後の
囲込岩陰墓
（B地区4号B墓）

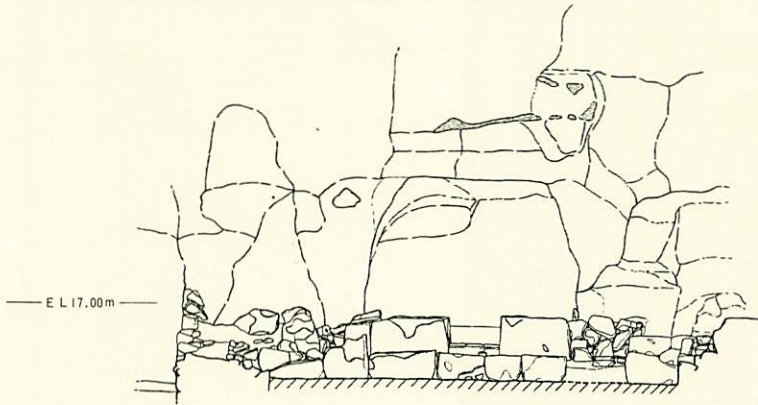


現場説明会（風葬人骨）

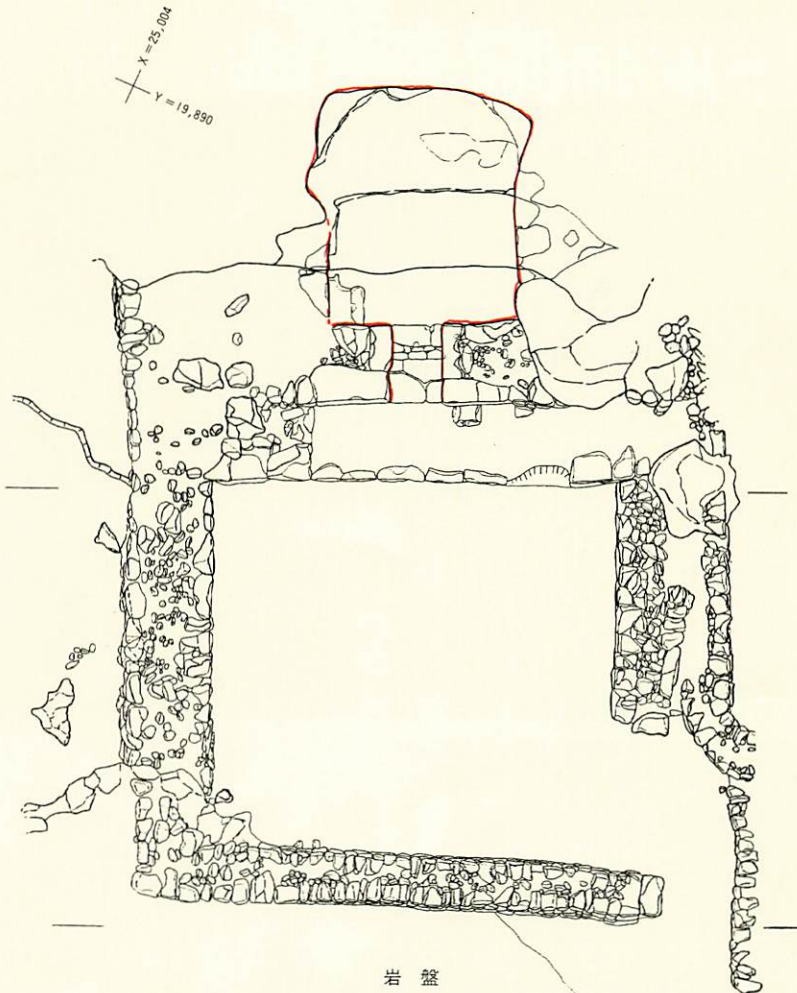
A地区第12号墓実測図 (第3図)

凡例

漆喰	
モルタルセメント	
ケバ	
土	
岩盤	注記

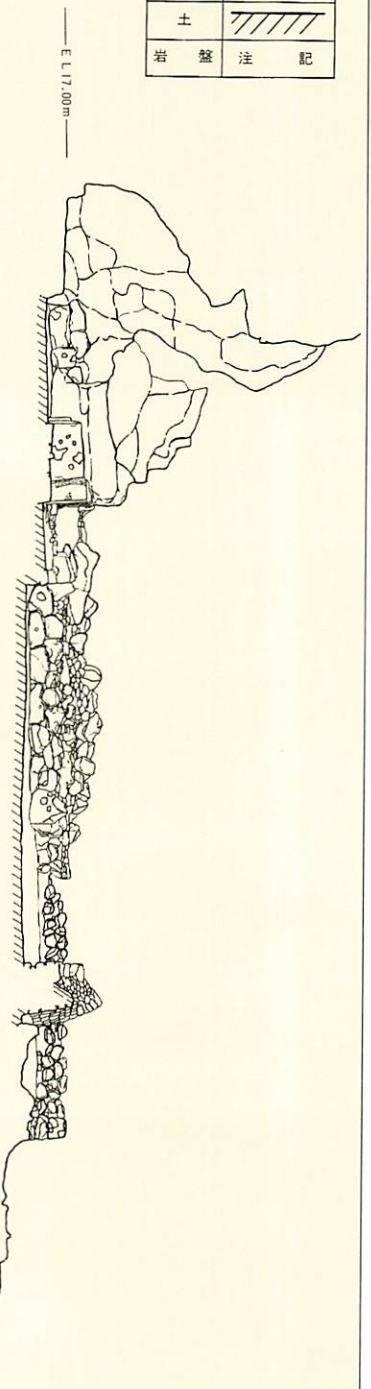


正面図

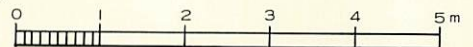


平面図

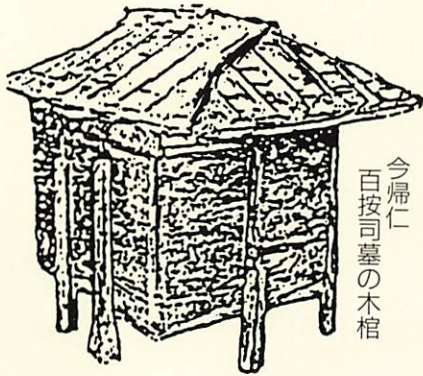
断面見通し図



入口正面図

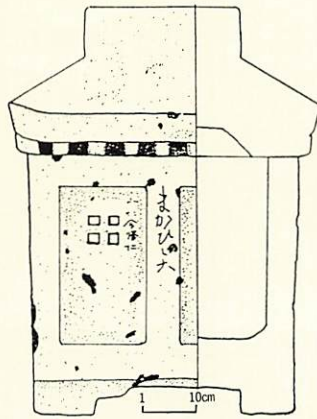


厨子甕の形態 (木・石・陶製) (第4図)

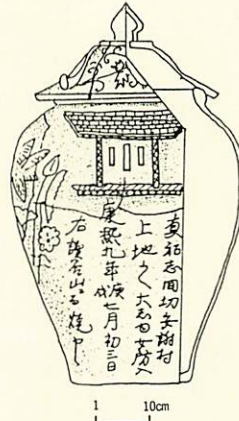


今帰仁
百按司墓の木棺

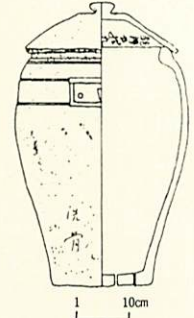
A. 東恩納寛惇
琉球新報社編
『東恩納寛惇全集』
第一書房



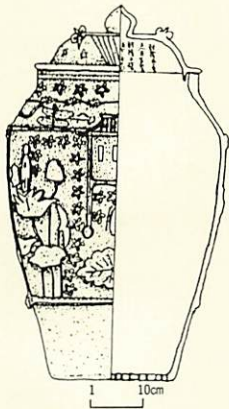
B. サング石製石厨子
(17世紀)



C. 喜名焼厨子甕
(1670年)



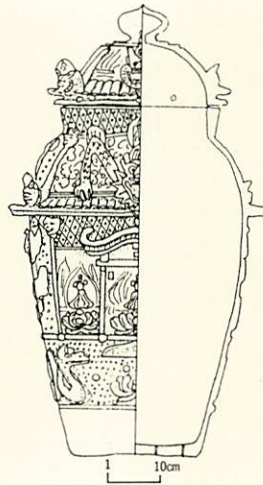
D. ボージャー厨子
(1764年)



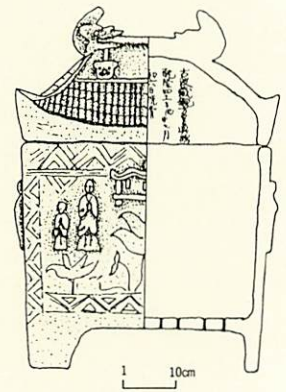
E. マンガン掛け厨子甕
(1787年)



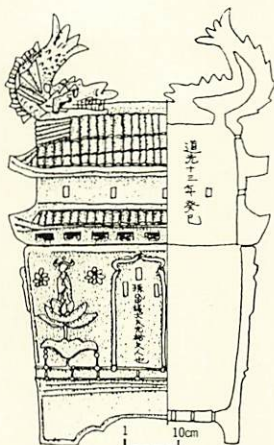
F. マンガン掛け厨子甕
(1929年)



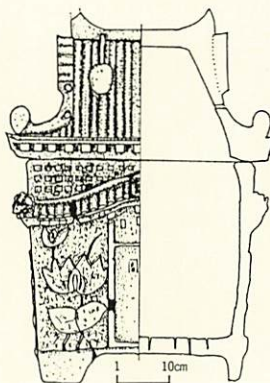
G. マンガン掛け底つき
厨子甕 (1876年)



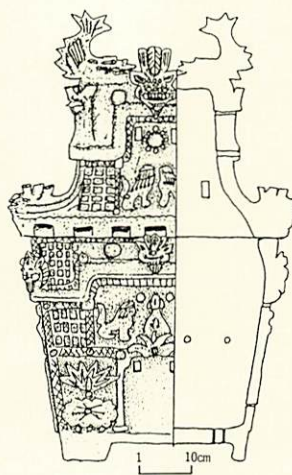
H. 赤焼御殿型厨子甕
(1776年)



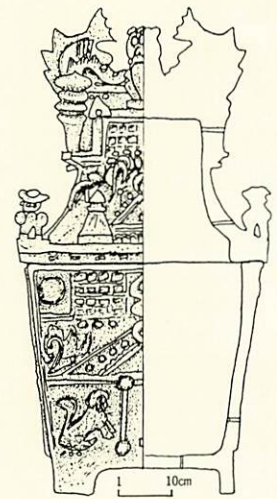
I. 荒焼御殿型厨子甕
(1833年)



J. 上焼本御殿型厨子甕
(1890年頃)



K. 上焼ツノ型厨子甕
(1846年)



L. 上焼コバルト掛け
厨子甕 (1918年)

